

4257

164
675

勝 諺藏 著作

演劇 脚本

化粧窓籬鬼百合

全

088524-000-2

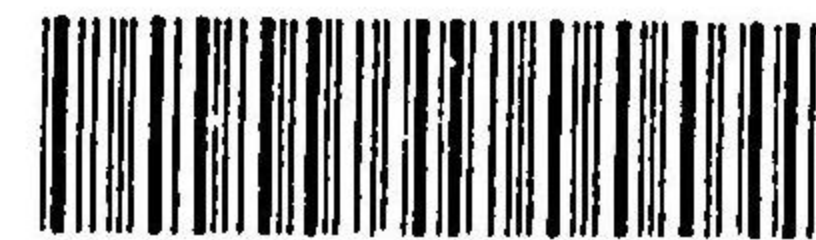
特52-606

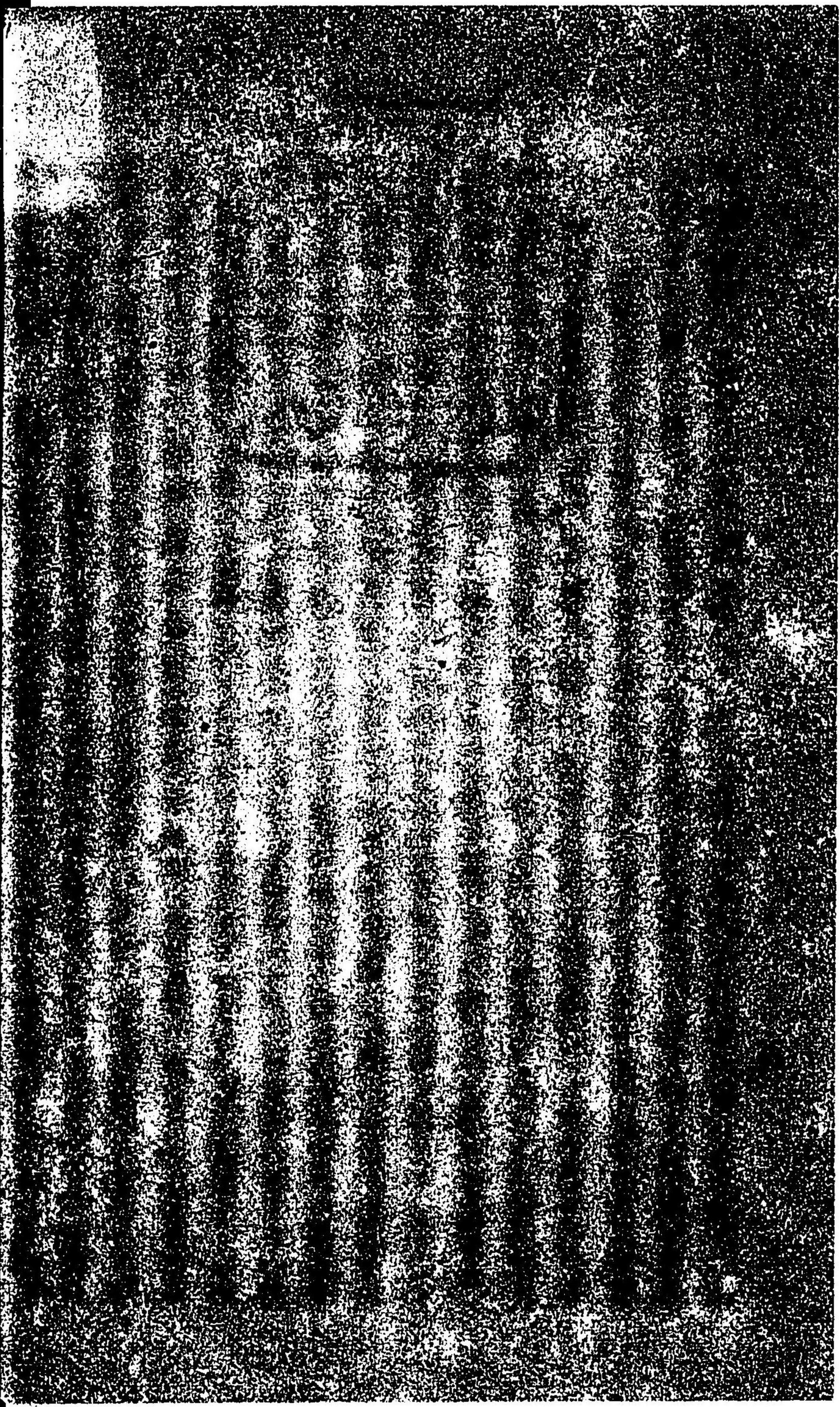
化粧窓籬鬼百合

勝 諺藏 / 著

M27

DBJ-0181





演劇本
化粧窓籠鬼百合

場 割

序 滿 來

神戸布引瀧茶屋の場
同諏訪山カンニン別荘の場

一 幕 目

神戸裏借家隣同士の場
同長狭通旅館屋の場

二 幕 目

須磨旅館親子面會の場

三 幕 目

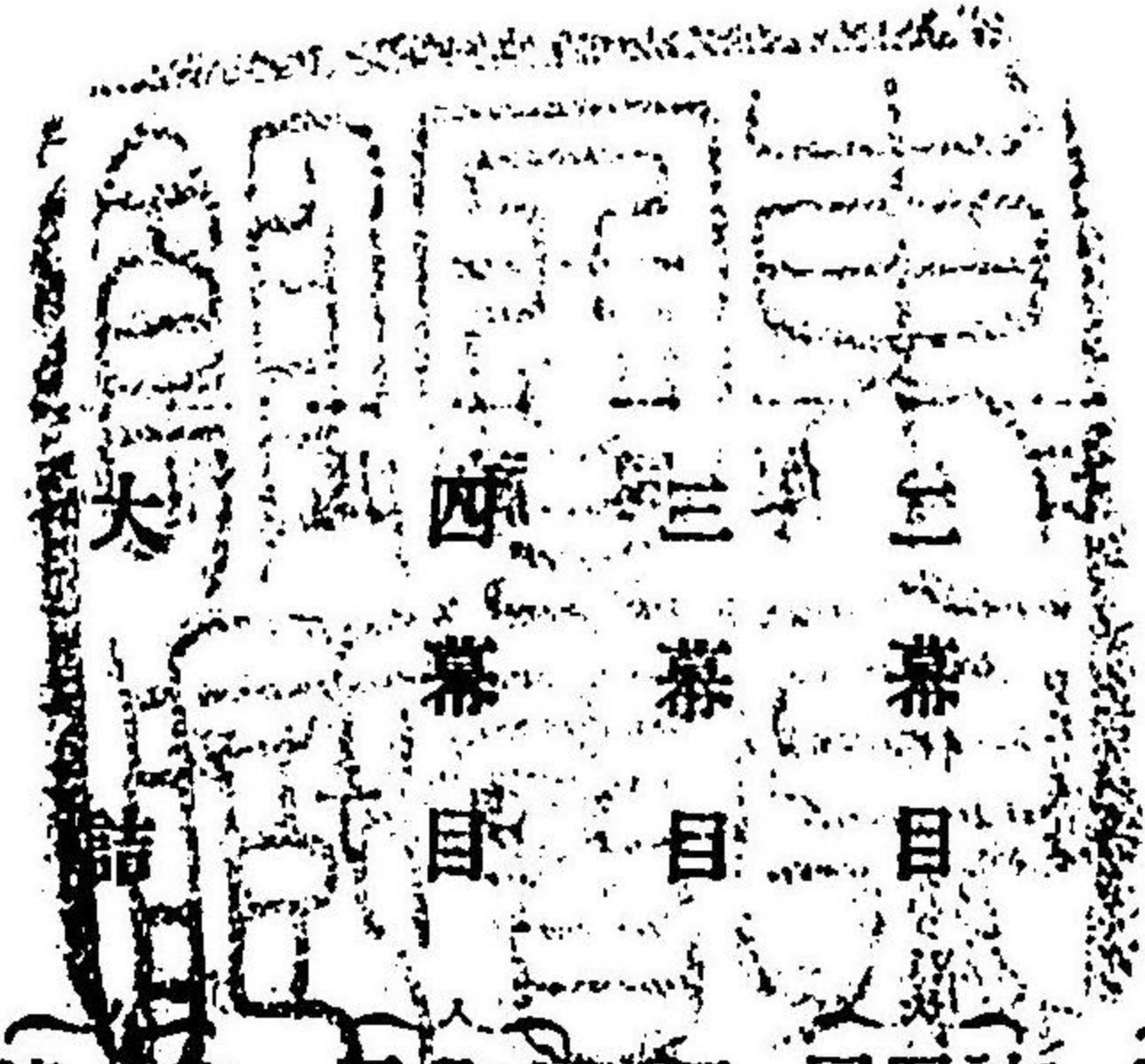
本所相生町居酒屋の場
神戸村山尾別荘の場

四 幕 目

妻の森閣討の場
書屋藤七内の場

大 結 語

ス井下商館の場
湊川堤庄吉捕物の場



昭和十一年六月十日

演劇 化粧窓籬鬼百合

序 満 来

役 人 替 名

一松	井 庄 吉	一米	人	カ	ン	ヨ	ン	ク
一洋	姜 お 百 合	一同	ス	イ	フ	ト		
一馬	丁 熊 藏	一手	代	善	吉			
一神	保 造 酒	一下	女	お	竹			
一同	莊 八	一茶	店	女	お	夏		
一娘	お 花	一穂	積	安	雄			
一お	花 母 お 虎	仕	出	四	人			
一横	溝 泰 助							

神戸布引の瀧茶店の場

本舞臺上手高二重岩組の蹴込み此上家体軒に紅毬燈蔭障子を出し掛け向ふ瀧を書割りし山の遠見此前岩組の張物下手浪布浪手摺松の立木同く釣枝都て布引瀧壺の体爰に床机に着物を脱捨仕出四人瀧を浴びて居る流行唄にて幕明く ○「チ、寒くなつた 三人」上り升うく

ト皆々此方へ来り着物を着て ○「斯う慄へる程瀧を浴ると夏も逃げて仕舞つた様じやなア □「夫で此布引へは毎日西洋人も納涼来るから茶屋はばるい事じやううな ×「其西洋人といへば諏訪山の彼別荘はカンヨングのラレヤメンのお百合といふが好みで建たといふ事じやあア △「諸君何と金錢の爲めに奴隷となつて最愛の娘に醜業をさすは歎はしき事ではあり升せんか ○「チイ龜さん演説を始めるのかロヤ〜 □「ロヤ〜といへば此冷々して居る内に一盃何うです ×「夫こそ本統の 三人」ロヤ〜くじや (ト二重の後ろへ這入る引違へてカンヨングお百合お花お虎出て来り」お虎「お花此布引の涼しいのに其汗は何じやいなア羞しいので上氣したのかいなア 百合「ホ、ホ、ホ、スキフトさん貴君色男お花さん羞ぢうあり升 ぶ花「アレお百合さん夫な事を カン「お花さん別嬪スキフトさん嬉うあり升 スイ「カンヨングさん貴君笑談ベケ (ト二重後ろよりお夏出て来り」お夏「雪をお上り被成升せ 百「姉さん御苦勞様でんした (トお夏二重の後ろへ這入る」スキ「私瀧掛り升 カン「私一所に掛り升 (ト瀧に掛る」お花「お百合さん米國人でも嬉しい顔をすれば心に嬉しい譯であらうがまんざらお花が氣に入らぬといふでもない様子 百「夫は安心しなさんせ彼素振りでは話の出来るは知れた事 虎「其話しが出来たらならお花得心をして往てくれへ 花「サア是迄お前が事を分け外國人の妾に行けばお百合さんの様に榮耀の仕次第其上母様の爲になるとのお話

しなれを妾しや怕うてならぬ故水仕奉公してありとお前の世話にするに因て 虎「夫はお前の口癖なれを水仕では十圓の前借も出来ぬ共娘奉公に往たなれば何百圓といふ金は何うでもなるとお百合さんの話し 百「夫にお花さんは怖いと思ふて居なさんすれと思ひの外に西洋人は深切で殊にスヰフトさんは此神戸の商館で一二を争ふ金満家マア妾に任して往て見なさんせ 花「夫でも往ては妾の思ふ莊八さんに 虎「エ 花「イマ何莊八さんとは隣り同士のおの孝行を見る時はお前の爲なり行かねばならぬと其事斗りは何う考へても 虎「否なら外の事を何なとするかへ 花「夫は妾の出来る事なら 虎「夫なら寧ろ妾を女郎に賣らう 花「エ、百「モシお虎さん待て下さんせ○お花さん能考へて見なさんせ娼妓の勤めは傍輩多く其氣兼斗りでなく親方の扱ひも慾にかゝりて樂はさせず其土南京さんでも黒奴さんでも客で其れば一晚に三人でも五人でも自由にならねばならぬ譯娘奉公は其様を犬畜生の勤と違ひ氣樂な上に榮耀が出来第一お金が澤山取れば親も安樂する事故お前の孝行にもなるといふもの斯して目見得もしたからいモウ得心をしなさんせ 花「エ、○夫から今日はわの目見得に 虎「母様が連れて來たのじや 花「エ、 虎「サア得心をせぬといふて此儘にはして置ねど、ペケを喰た時骨折損にならぬ様目見得を先へさしたのじや 花「然とは知らずお百合さんの所へ遊びに行く事と母様と行て見れば此布引へ行うとも怕々ながら手を引かれ來たは目見得

得でんしたかいなア 百「友達中の妾故悪い事はせぬに因て 虎「宜しうお頼み申升といはぬかいなア「ト米人二人此方へ來り」スヰフト「お百合さん夫さん涼いカン」瀧宜い「ト洋服を着るお百合カンコンクを手傳ひながら」百「ソレお花さんスヰフトさんに 花「ハイ 虎「エ、エ、エ」○モシ娘がお着せ申升わいなア「ト突やる是にてお花手傳ふて着せる」スヰフト「貴嬢深切宜い 百「貴君お花さん娘宜い スヰフト「私大さん宜いベケいや周旋頼む宜い 百「妾周旋する宜い○お虎さんお前も聞く通り故得心さして下さんせ 虎「そりやモウ此子が得心をするもせぬもないわいなア 花「ア、モン待て下さんせ私も篤り思案の上 虎「モウ思案も入つた事か妾でお約束をせねば濟まぬじやないか 百「ア、モンお虎さん無理からやつては情が薄うて跡の爲にならぬ故 虎「夫でもこんな強情では 百「ハテ夫は妾の胸にあれば安心をして居なさんせいなア「ト上手より村木善吉出て來り」村木「旦那是にいらつしやい升か 百「貴君は村木さん カン「貴君用事あり升か 村「松井庄吉さん一所に來た貴君逢ふ宜い 百「夫ではあの庄吉さんが 村「ハイ横溝といふ人とお出なかり升た故商館から別莊へ往て爰と聞てお連れ申て來たのです 百「夫は御苦勞様○貴君庄吉さんに茶店で逢ふ宜い カン「庄吉さん話し金儲け宜い 百「村木さん今貴君御一所に 村「ハイお連れ申升 カン「スヰフトさん茶店へ行く宜い スヰフト「サアお花さん一所に行く宜い「トお花の手を捉る」カン「スヰフトさん大さん

氣に入る宜い「ト皆々二重の後ろへ這入る村木跡に残り」村彼娘も赤髭の喰物とは思えし
 い事じやなア「ト上手より庄吉泰助出て来り」松井村木さん此暑いのには御苦勞であり升た
 横河誠にお前さんには氣の毒な村旦那が茶店でお目に掛ると申升たから御一所に参り升
 せう松然し直ぐに往てもよいか一遍伺つて下さい村夫ではお待下さいと「ト二重の後
 ろへ這入る」横松井さん今カンコンクさんに逢へば大概話しは分り升せうか松夫はお
 話しする通り諏訪山にある地所の持主宮本十平さんは三千圓に賣らうカンコンクさんは六
 千圓に買うと私が両方談しを極めたれど名前替へをする間拂う金に困つた故お前さんに二
 千圓の利益を分ける約束で元金出して下さる約束其賣直を確める事故逢ふたら得心の行く
 迄談しをして下さい横夫が彌其通りなら此時節にばるい金儲けじや「ト二重へ村木出て
 来り」村木松井さん旦那が今其處へ行き升から少し待て居て下さい松承知し升た「ト村
 木は這入る」松爰へ来るろうです横夫では緩くり聞くと仕升せう「ト二重後ろよりカ
 ンコンク出て来り」カン松井さん失敬松カンコンクさん御愉快か邪魔失敬横夫では此
 お方ですか松然です横私は横溝泰助と申升何う御最負にお願ひ申升カン貴君失敬松
 貴君諏訪山の地面六千圓入用あり升かカン私大さん望み六千圓宜い横夫では何時でもお
 買ひ被下升かカン遅いベケ明日取引する宜い松是で御安心でせう横安心所か軍艦に

乗つたより大丈夫といふもの松井さん万事宜う松カンコンクさん地所此人持主六千圓賣
 り升カン金渡し升今日名前替頼む宜い横夫では今日でもあの金を松名前替と一時み
 受取れ升横今日といふては名前替も出来升まいなア松明日でなければ時間があり升せ
 んなア横ア、金が目先にぶら附ながら受取れぬとは惜いもの松夫も今日の事なれを
 横約束をして置いて下さい松今日ベケ明日宜いカン談し極る私歸る宜い松私跡から別
 荘行き升カン左様から「ト二重後ろへ這入る」横お前の詞に随ふて彼様に取極たもの
 誠の持主が賣らぬといふたら騒動じや松何夫は私が先方は極めてあるから安心しなさい
 万一違ふた所で口約束じや心配な事はあり升せん横夫なら直ぐよ出掛やう松ア、一寸
 待て下さい折入てお頼みがあり升が○實は私の身に附て今日に迫つた金の入用何か右の口
 錢の千圓の金を振替ては被下升せぬか横夫と義の堅い異人の事故間違いはあるまいけれ
 ど千圓と一口にいふもの、一厘錢で百万文算む斗りでも容易でない大金故えらい悪るけれ
 どマアお断りをせねばならぬ松其金が出来ぬ時は身を隠さねばならぬ場合何卒助けると
 思ふて横いけ升せん私は義理も捨顔の潰れる位は何とも思はず集めた金故僅か一度商賣
 の約束が出来たといふて前金の手数料はお断り申升松貴君に權利のある金故夫では何
 も仕方がない横仕方がなければ何被成る松何といふて身を隠し升横ニ松私が身を隠

せば義の堅いカンコンクさん故私が立合はねば取引は逆も出来まい誠に貴君にはお氣の毒
 でなり升せぬ○破談と見れば宮本へ足を運ぶも無駄な事是でお別れ申升 横「ア、モシ一寸
 待て下さい 松「何ぞ用でムリ升る 横「サア能々考へて見ればお前さんが身を隠せば二千圓
 といふ金も儲らず如何にも千圓振替へ升せうが利息の所は承知であらうか 松「夫は無利息
 ともいはれ升まい 横「夫で二百圓下さるか 松「エ、横「サア少と高い様なれ私元が高
 歩貸ぼろい儲けの金を當故一日一割から無理もあるまい 松「宜い命に關る場合故高いけれ
 共出し升せう 横「お前さんも好い金儲けじやアハ、 松「夫から徐々出掛けやう 横「徐々
 ではない大急ぎで宮本の談しを極めねば安心出来ぬ 松「サアお出被成い「ト上手へ這入る
 引違へて莊八造酒出て來り」 莊八「サア父上是でお休み被成升せ 造酒「一服致さうか 莊「今
 日は御氣分も宜いやうで此莊八も嬉うムリ升 造「夫は其方が孝心の厚ひに附けても癒る道
 理じや 莊「何分肺病は空氣の宜い所へ行くが薬との事故日々海岸か此布引へお連れ申譯で
 ムリ升るが 造「夫よ附ても情ないは世の盛衰旗本の家に生れし其方を車夫にせうとは思
 なんだ夫も親が病氣故休み勝の困難を親に隠す其方が氣苦勞夫を思ふと死度わい 莊「夫な
 事を仰有て被下升るな今では親一人子一人の便り少い私をば不憚と思ふて御全快被成て
 被下升せ責て二人の兄上が御維新の時討死を被成すばこんな御不自由はさせまいもの今に

私が出世をしてお目に掛け升れば何卒夫を樂みに被成て被下升せ「ト二重の後ろよりお花
 出て來り様子を聞居て」お花「莊八さん 造「ナ、貴嬢はお隣りの 莊「お花さんでムリ升か○
 毎度洗濯物や何くれとお世話に預るお禮にも母御の手前を兼參り升せぬが 花「アレマア堅
 苦しいお世話申も此妾の心で極めた末は女房 造「莊「エ 花「イエ何女房さんもないお内何な
 と遠慮は入升せぬわいなア 造「莊「難有ムリ升「ト上手より穂積出て來り」穂積「御免なさい
 造「サアお掛被成升せ 穂「ヤ貴君は神保の殿様でムリ升せぬか 莊「何父上を殿様と仰有る
 からは古いお馴染造「お見忘れ申たがシテ貴君には 穂「舊幕時代は御家來にて穂積甚太夫が
 悴安雄でムリ升る 造「何甚太夫の悴とさ 莊「私はさつぱり忘れて居升た 穂「何にしても御
 機嫌宜くお目出度うムリ升 造「其方も無事にて成長なし 莊「料らす逢ふたる私も悦び 造「
 シテ甚太夫には息災にて暮しおるか 穂「イエ親共には病死致し升てムリ升る 造「何甚太夫
 よは 莊「病死せられしとさ 穂「徳川家瓦解の節お別れ申て病氣中にも御恩を受けた神保様
 のお行衛はと申てあり升たが今日料らすお目に掛り嬉いに附其お身形り 造「莊「エ 穂「如何
 に世の變遷とは申せ千五百石のお旗本が斯迄御零落とは存じ升せなんだ 花「夫から神保さ
 んはお旗本で 造「有りし昔の影もなき姿で元の家來に逢ふも 莊「お花さんに聞れるも愧し
 き身の成行 造「安雄殿聞てくりやれ○某官軍に敵對しも次第く討惱み悴共には兩人共

討死なせし味方の敗軍如何に幕府の高恩を思へば逆朝敵となりし我不所存其冥壽にて零落せしと思へば我身を恨むなり 其親人に孝養を盡す力も情ない車夫に落ちての御病氣故醫藥も自由にならぬ悲しさ 其方には此神戸もイヤ住居は矢張り東京でムリ升るが其後御縁家玉手様のお引廻しに預つて官途に就き身の落着き今度玉手の御前には避暑の舞子へお越になり暑中休暇を幸ひにお供致して参り升たが今日一人布引を見物に来て料らすもお目に掛りえ悦ばしさ 兼て玉手義信殿には 伯爵となられしと世間の噂も然いふお方がある事ならおぢさんの養生の出来る様穂積さんからお話しを 我私も神保様の成行を 話してくれては面目ない 又逢ふ時節もあり升せううい 世の輕薄に染みもせず近い縁者へ身を愧て口止被成る御潔白實に感心致し升た 然うお聞申上は寧ろ母様の詞に随ひお二人様の御難義を 花エ 花イエ御難義被成るがお氣の毒でムんすわいなア「ト上手よりお百合出て来り」 お百合「お花さん爰に居たういなア 花「お前はお百合さん 百「サアスヰフトさんも歸るといふ故妾と一所に早くお出 花「イエ妾しや跡から 百「ハア一所にお出といふに「ト兩人二重の後ろへ這入る」 今呼びに参りし女は何した人でムリ升か 彼は隣りの娘御の友達にて 妾洋妾になつて居る者とやら 然し悴歸ると致さうか 妾「お供致し升せう 妾「モウお歸りでムリ升るか何れ改め伺ひ升るがソレ只今のお住居は 道「イヤ今の住居を見らるゝも面目ない 妾「又逢ふ時節を待て下さい 左様あれば差扣るでムリ升せう 道「夫では穂積 妾「安雄さん 妾「お二人様 妾「サアお越し被成升せ「ト上手へ這入る」 昔は天下の旗本にて神保造酒ともいはれしお方が見る影もないあの有様アお氣の毒な〇「トはるりとするが道具替りの知せ「事じやあア「ト此模様宜く流行唄にて道具ぶん廻す

カンニング別荘の場

本舞臺高二重楼づかの蹴込み見附床の間違棚障子下手障子家体上手西洋樹木の書割此
前草山平舞臺泉水松の釣枝都て諏訪山別荘の体爰に熊藏お竹居て浮た台方にて道具納る
お竹「何じやいな熊藏さんゑらさうに餘所の座敷で蹴鞠を組んで 熊「タイくお竹さん何ば
僕が別當だといつて然安くないたものじやアねへ僕の旦那のヰヰさんが爰の旦那と布
引へ出掛る時に待て居るといつたら待間に賄の婆さんに強談て一盃呑み始めたのだ 竹「
呑むなら臺所へ往てお上り爰では妾が呵られるわいなア 熊「お前は勝手に呵られるがい
僕は勝手に呑むのだ 竹「否じやくくわいなア 熊「エ、喧い打遣つて置け「ト奥よりお
百合出て来り」 お百合「何を大な聲をして居るのじやへ 熊「貴婦はお百合さん 竹「今お歸り
ムんしたか 百「妾は一人で此方へ歸りスヰフトさんと妾の旦那は御用がある迎商館へ歸

つて再びお出の約束、竹「夫なら旦那も彼方へ往て、熊「又お出を待内に、百「彼方で寛り呑みなさんせ、熊「ドレ退去と出掛け様か、ト奥へ這入る、竹「然してお召替へは、百「浴衣にでも着せ替へておくれ、竹「ハイ○「ト奥より持來り着せ替へる事あつて、ドレ勝手の用を片附け升せうわいなア、ト奥へ這入る、百「ヤレ、是で先此方の骸赤髭の勤めも本統に否だなア、ト奥よりお虎出て來り、お虎「お百合さん、百「ハイ○「何だお虎さんか、虎「何も悔りて行義に改まらないでも宜いではないか、百「旦那と思つて悔りしたよ、虎「本統に旦那の前と樂家の内との大違ひだね、百「其處が勤めの苦しい所サ、御免なさいよ、虎「其勤めといへば不思議にお花が得心したわいなア、百「彌行く氣になつたなら今夜直ぐに遣つてお仕舞、虎「夫と妾も其積りさ、ト奥より松井出て來り、松井「御免なさい、虎「サ、松井の庄吉さん、松「お虎さん來て居なかつたか、虎「眞面目にちらすとお寄りなさいな、お百合さんも何とかいつてお上げなさい、百「ハイ○「庄吉さんですか、松「お百合さん何かなさつたのです、百「何しやうと貴君に關係はあり升せんよ、虎「餘り關係のさい事もあるまい、松「百「エ、虎「二人の深い中は知つて居らアね、百「知つて居るなら隠すにも及ばない本統に愛想の盡た庄吉さんだからね、松「なせ、百「自分の心に問ふて御覽な、虎「モウ妾は歸るよ、百「ヤア宜いではないか、松「寛り話してお出なさい、虎「跡で寛りおふさげなさい○左様なら、ト奥へ這入る、松「何がどうだかさつぱりと分らない、百「分らない事があるものかお前今迄何處へ往つて居たのだ、松「何處へ行くものう彼一件で千四百圓取つて來た、ト風呂敷包みの紙幣を投出す、百「チャ味くお遣うだね、然し百圓と何うおした、松「夫はお百合斯いふ譯だ、○さつき泰助をカンニングに逢はした所兼てお前から吹込んで取た金は山分との慾に掛つた赤髭も片言交りの儲かな返答金に目のない泰助もぐつと信用した様子此奴締たと千圓の前借を胡麻化した所利息を百圓くれとの事高い様だが只取る金故利は先へ拂う事とし宮本へ往て二千圓の地面を三千圓で買ふ約束も五百圓の口錢で取引濟まして持て來た譯、百「成程然聞くと仕方がないが此五百圓は赤髭は知らなからう、松「知つて居るのは千圓丈だ、百「夫も尙受取らぬといつてお置きよ、松「夫は元より承知じや、ト奥より熊藏様子を聞居て、熊「大層味へ仕事をするなア、百「ヤア前は熊藏さん、松「夫なら今の様子をば、熊「聞た所かお百合さん迄、子のお兎とは味過るじやアね、松「然う知られたら仕方がない實は此お百合の思附きで、百「妾の旦那の赤髭も筋の宜くない慾張り故斯々返事をしてくれたら金の山分け金さへ取れば跡は破談の約束で今日成就した此仕事、松「夫といふも横溝が慾深いから掛つたのサ、熊「夫な仕事と聞くからは素手では通さぬ金齒の熊藏此分口は當り前サ、松「夫はいふ程熊さん野暮だ、百「万事は妾の胸にあるから、熊「夫なら吃度口塞げに、松「金が欲しく

を金もやらうし 百「何でもお前のいふ通りサ 熊金を貰つた其上で羞かしいが僕の戀も松
 百「エ 熊イヤ何斯いふ仕事を聞出すのも僕の運氣が直つて來たのだ」レモット呑んで待
 うか「ト奥へ這入る」 松「タイ彼熊藏の目に掛ちやアモウ迂濶して居られぬいせ 百「だから
 お前は今夜の内身を隠して居ておくれ妾は二三日様子を見て目欲しい物を持って出るから松
 「夫じや然してくれ 百「夫迄の小使ひ錢に百圓お前に渡して置いて跡は妾が持て居るよ 松
 然して熊藏への口塞げは 百「馬鹿な事をかいひでない隨徳寺を極める日には跡は尻喰ひ觀
 音サ 松「成程夫も然だなア」ト奥よりお竹出て來り」 お竹「只今且那樣が 松「何カンニ
 グさんが 百「お出のへ 竹「ハイ」ト奥へ這入る」 百「赤さやんに逢つては面倒だから庄さん
 松「然た歸らうがシテ出會ふ所は 百「夫の斯しておくれ」ト叫く。松「夫でハ彼宿屋で待て
 居るせ」ト下手家体へ這入る奥よりカンニグ出て來り」 カン「私今來た失敬 百「貴君熱か
 つたであり升せう」ト團扇にて煽く」カン「憚りさん 百「お花さん娘行き升 カン「お花さん
 別嬪スヰフトさん嬉しい 百「貴君お花さん好きあり升せう カン「知り升せんよ 百「此罷で女
 を迷はして憎らしい」ト髭を一本抜くが木の頭」カン「ハツクサメ 百「お風を召してはいけ
 升せんよ」ト此模様宜く浮た唄にて拍子幕

二 幕 目

役 人 替 名

- | | | | |
|--------------|-------|------------------|-----|
| 一毒 婦 | か 百 合 | 一お 虎 娘 | お 花 |
| 一松 井 庄 | 吉 | 一横 溝 泰 助 | |
| 一馬 丁 熊 藏 | | 一玉 手 家 扶 小 宮 雄 藏 | |
| 一神 保 造 酒 | | 一醫 者 橋 三 益 | |
| 一車 夫 神 保 莊 八 | | 一夜 蕎 麥 賣 藤 七 | |
| 一竹 林 か 虎 | | | |

神戸裏借家隣同士の場其一

本舞臺平舞臺見附佛壇此下戸棚鼠壁上手障子家体例の所門口下手隣の入口都て神保造酒住
 家の体愛にか花三益居て稽古唄にて幕明く「トお花掃除をする事あつて」お花「餘り埃りが
 ひだうムり升故一寸掃除を致て上げ升た」ア先生何卒此方へ 三益「夫では御免」其方のお
 頼み故參つたがシテ御病人は 花「夫は愛の親御さんでムり升が」何分宜う伯父さん一寸來
 て被下升せ 酒「只今夫へ參るでムらう」ト上手家体より出て來り「是はお花殿毎度御深
 切に」シテ此お方は 三「手前は橋三益と申醫者でムるがお花殿の御依頼に因お見舞に參り
 升た」遣「夫は何から何迄御深切に何にも申さぬ此通りでムる花「イエ」其様にいふて下さ

り升な是といふも莊八さんに○イエ何莊八さんもモウお歸りでムんせう程にモレ先生様造
「ア、イヤ御診察を願ひ升てもお薬や何や彼や 花「イエ其事は御遠慮なく 造「然らば願ひ
升せうか 三「ドレ」ト向ふより莊八車を曳き出て來り」莊八「親仁様の御病氣も其日くの
買藥り何か御全快をさせ升たいものじやなア○」ト内を見て「ハテな醫者が來て居る様子
じやが○只今歸り升た 花「チ、莊八さん戻らしやんしたか水を汲で來て上げ升せう 莊「イ
エ足ハ井戸で洗ふて來升」ト車を曳橋掛へ這入る」三「イヤ全く肺病にはムれ共手當を施せ
ば御全快にはなり升せう 花「然してお薬は 三「ランプの點頃にお出なさい 造「難有存じ升
る」ト橋掛りより莊八出て來り内へ這入る」造「チ、莊八此お醫者様をお花殿が頼んで被下
ての 莊「夫はマア難有ムり升る又先生様にも御苦勞様にムり升る 三「只今診察致し升たが
成丈骨を折て見るでムれば御安心なさい 莊「何卒宜く 三「夫ではお暇致し升る」ト門口へ
出るを」花「お藥禮の所は妾から致し升れば 三「承知致した」ト橋掛りへ這入る」造「若
いに似合ぬお花殿の御深切拙者も感心致して居る 莊「定てお内には用もあり升せうに 花「イ
エ今迄は見廻つてお世話も仕て上升たれ是から餘所へ行かねばならねば 莊「行くとは何
所へ 花「奉公に參り升わいかア 造「夫では其方は奉公に 花「夫も異人に此身をば 莊「造「エ
花「イエ貴君親御を大切にしてお上なさい升せ 莊「そりやモウ一人の親なれば籠畧には致し
升せぬ」ト少お脊中を撫り升せう」ト向ふより熊藏出て來り隣の門口にて「熊藏「チイお虎
さん内に居るか」ト下手入口よりお虎出て來り」お虎「チ、熊藏さん用かへ 熊「おつかア今
日連れて來る約束故お前の娘を迎ひに來たのだ 虎「チャ」御苦勞だねへ○」ト此方の門
口へ來り「お花や」 花「アイ」 虎「ト門口へ來る 虎「隙さへありやア這入込んで何をし
て居るのだへ今熊藏さんが迎ひに來たから直ぐに行くのだよ 花「今行くわいなア 虎「エ、
早く來るといふに○熊藏さん着物を着替へる間爰に待て居ておくれ」ト兩人内へ這入る」
熊「火を」つお貸しなすつて下さい 莊「サア」お附けなさい 熊「女の出るのは面倒臭いも
のだなア」トお虎お花出て來り」 虎「大きにお待たう 熊「大層待したじやアねへか 虎「モレ
お隣さん一寸留守をお頼申升 莊「寛り往てお出被成升せ 花「夫では莊八さん○留守をお頼
み申升 虎「エ、妾がいふたら宜いわいなア○サア行升せう」ト三人向ふへ這入る」 造「イヤ
モウ彼程心が違ふても眞實の親子であらうか 莊「何でも彼子で樂をする氣で旦那を探して
居る様子兎角當節は女の子で私などこ有て益ない親の厄介 造「何と申武士の家には男子な
らでは役に立ぬ兎角下々の者は日本の耻も厭はずに異人屋敷奉公さすが歎はしい事じや
わ」ト向ふより雄藏出て來り 雄藏「只今承れば行當りと申たが向ふであらう○少物がお尋
ね申度 莊「ハイ 雄「竹林虎と申は何れでムるか 莊「夫は此隣でムり升る」ト雄藏造酒を見

て「其許様は神保様ではムリ升せぬか」雄「チ、小宮殿でムるか」雄「料らざる此お出會○誠に一別以來お異りもなく」雄「其許にも堅勝まで大慶に存じ申影ながら承れば御主人にもお異りなきとの事」雄「主人義信義も徳川家瓦解の後は絶へて御音信もムらぬ故お案じ申ており升れば此事お話し申なば嘸お悦びにムリ升せう」雄「イヤ其義は御無用に下され斯るいふせき体を御覽よ入るも心苦るしく」雄「又縁者杯と申なば却つて玉手殿の御外聞にムリ升れば親共の申通り決して御主人へお話しは」雄「イヤ」雄「其處は拙者より宜きに申上るでムリ升せう」雄「シテお虎には何用あつて見へられしか」雄「只今の留守なれば御傳言で宜い事なら」雄「イヤ少子細ムつて直さ」雄「尋ね度用事でムればお虎が歸宅致と迄お邪魔致すでムらう」雄「向ふよりお虎出て來り」雄「大に難有ムリ升た」雄「チ、お虎さんお歸りか」雄「其方を尋ねて此仁が」雄「チャ」雄「扱はお前がお虎か」雄「ハイ然して貴君は」雄「イヤ何事もお宅へ參て申でムらう○大にお妨げを仕つた」雄「左様ムれば小宮殿」雄「失禮御免被下升せ」雄「サアお出被成升せ」雄「ト下手入口へ這入る」雄「昨日は甚太夫の忤に出會又候雄藏に面會なし斯る貧き住居を見せ實に愧かしき事ではある」雄「其様な事をさなく」雄「思召と御病氣の障りお心に掛けぬが宜うムリ升る」雄「夫にしても小宮は何故お虎を尋ね參つたか」雄「娘の事ではムリ升まいか」雄「イヤ玉手は年齢といひ物堅い男なれど」雄「小宮が用事をいはぬといひ」雄「先刻奉公に行くといふお花殿の詞といひ」雄「若しや夫等の相談か」雄「何にしても心得難い○」雄「ト咳をとるが道具替りの知らせ」雄「事じやわへ」雄「ト此模様宜く合方にて道具ぶんど廻す

神戶裏借家隣同士の場其二

本舞臺常足の二重見附押入暖簾口鼠壁上手障子家体下手開戸此次中窓の鼠壁都てお虎内と神保裏口の体爰に雄藏お虎住居合方にて道具納る」雄「夫では貴君様が玉手様の御家來小宮雄藏様でムリ升るか」雄「左様でムる扱其許の丹誠にて花子様もお健かに御成人と存ずれば斯様な悦ばしい義はムらぬ」雄「然してお出の御用は」雄「此度主人舞子に御滞在被成るも實は花子様お迎ひ旁參つた譯」雄「エ、」雄「サア夫と申も今日迄は奥方の手前を兼其許に御養育を願ひしが其奥様にもお隠れに相成花子様にもお十七定めて學校も卒業遊ばされ連れ玉手家の御令嬢と申ても愧しからず改めて御親子御對面の上御息女も遊ばす思召」雄「夫ならあのお花をば○」雄「イヤ何お花様をでムリ升るか」雄「如何にも」雄「テ花子様は御在宅でムるか」雄「イヤ今屋敷へ○」雄「イヤお優しいお生れ故此事お聞遊し升たらお悦びでもムリ升せうが生憎今日はエ、あの大坂迄」雄「ヤレ夫は遺憾千万夫では明日舞子迄お供致して貰ひたい是は甚だ些少なれ共三百圓お禮として其許へ下さる又後々の義は主人に思召がムらう」雄「エ

餘りひどいじやアねへか 百「其腹立は尤だが心の急な斗りに逢つて話しも出来なんだが野暮な事をいはないでサア是を持って歸つておくれ 熊「こりやア只百圓か○百や二百の端た金を貰うと思つて來ねへのだ 百「然してお前の望みはへ 熊「僕はお前に惚れて居るのだ 百「エ、熊「色になつてくんませへ○今迄心に思つて居た此望みさへ叶へてくれたら見た事も聞た事も黙つて居るがお百合さんお前の了簡一つにて鬼ともなりやア佛共なつて見せる金齒の熊藏性根を据へて返事をしろへ 百「お前が然いふ心なら何を隠さう妾の方でもとうから惚れて居るのだよ○何時もお前を見る度に意氣な人だと思ふ内彼庄吉と色になつたも金に惚れた妾の慾地面で取た彼金は巻上げたれど此仕事に掛るに附て手切の金を持たしてやれバモウ是から關係のない此骸表の玉手の姫君でお前は妾の蔭の亭主野暮な事をかいひでないよ 熊「夫なら本統にか 百「可愛男に腔がつけるものか○「ト此以前下手の裏口より莊八出て來り様子を聞居る「チャ其處に居るのは誰だへ 莊八「私は隣の者でムリ升るがお虎さんはお内にでムリ升るか 百「イエ留守だが御用ならお這入り被成升せ 莊「御免被下升せ○先刻の小宮といふ人はモウ歸り升たか 百「エ、夫なら貴君お近附でムリ升るか 莊「夫は縁者の家來故○お虎さんがお留守ならモウお暇致し升 百「ア、モン貴君の襟に虫が 莊「エ、ト、何處にでムリ升 百「取て上げ升せう 莊「夫は恐入り升「トお百合後るより熊藏の手拭にて首を締る莊八落入る 熊「ナイ何したのだ 百「殺したのサ 熊「エ、百「玉手の家の縁者だと自分の口からいつたのが自業自得の此往生此死骸を何かしておくれな 熊「何ぞ入れる物はなからうか○「ト戸棚を明け「あるくこんな葛籠がある 百「是はお詔へ向だ 熊「チャ雜物が詰つて居らア「ト中の物を出し莊八の死骸を中へ入れる 百「斯して置いて夜が闌けたら海岸の通りうら水葬禮熊さんお前を頼むよ 熊「何だ僕が捨に行くのか 百「是から夫婦の中であいか 熊「よし／＼脊負て行う「ト下手裏口より造酒出て來り「造酒「ハイ御免下さい手前は隣家の者でムるが此内へ悴は 熊「百「エ、造「參り升せぬか 百「イエお出ではムリ升せぬ 熊「外を聞いて御覽下さい 造「參つたに違ひムらぬが○夫に悴の履物が 熊「百「ヤ造「隠さす是へ○「ト咳を仕掛け腹を押へるのが道具替りの知せ「呼で下され「ト此模様宜く合方にて道具ぶん廻す

神戸長狹通旅籠屋の場 其一

本舞臺本庇一面に兩戸を建真中潜戸上手泊り宿河内屋と記したる白壁の腰羽目下手格子の書割都て旅籠屋表掛りの体お虎立掛り合方にて道具納る 百「虎「ナイ河内屋のく「ト向ふより泰助出て來り 泰助「何處へ逃げおつたか「ト潜戸を明け吉助出て「吉助「何方でムリ升る 虎「松井さんは泊つており升かへ 吉「ハイお出でムリ升 虎「夫ではお虎が逢ひに來たと

いふて下さい 吉宜うムリ升「ト内へ這入る泰助様子を聞居る」 虎「早く渡す物を渡して年明にしたものだ」ト吉助出て来り「吉此方へお道入り下さい 虎「大きに憚りさん」ト内へ這入る 泰「ア、モン番頭さん 吉「お連でムリ升か 泰「此方に居る松井といふは年の頃三十位の人でムリ升か 吉「へい左様 泰「鼻筋の通つて目のはつちりとした 吉「へい 泰「眉毛の濃い辨口の上い 吉「左様 泰「役者でいふて見様なら〇〇〇〇といふ様な人物ではムリ升せぬか 吉「然でムリ升 泰「シテ何時から泊つており升か 吉「昨晚お出になり升た 泰「夫では彌庄吉に違ひない當人に知らさずに内へ入れて下さり升せ 吉「へい御案内を致さ升せう」ト内へ這入る是にて道具ぶん廻す

神戸長狭通旅館屋の場 其二

本舞臺常足二重見附床の間違棚一間二枚の唐紙戸棚を書割し茶壁上手障子家体下手跡へ寄せて杉皮の屏庭松石燈籠都て宿屋下座敷の体庄吉お虎住居合方にて道具納る 庄「吉全体手紙を寄越といふが分らないがマア讀で見様〇」ト手紙を讀む事あつて「人を馬鹿に仕やアがるなか虎さん様子を聞かしてくんねへの畜生め 虎「妾は何にも知らないがマア此千圓を取てお置よ結構なものではないのいなア 庄「糞でも喰らへ此金は儂が預けて置た金尙三百圓彼奴の手にあるのだ 虎「チヤマア然かへモウお暇を 松「マア待てくんねへ聞く事がある 虎「イエ妾は何にも知らぬ事故ハイ左様なら」ト奥へ這入る」 庄「是サ待ねへといふに」ト行くとするを泰助出て来り「泰助、庄吉さん何所へ行くのじや 庄「ヤ泰助さんか 泰「お前彼地面の事は何してくれる金を取つて姿を隠すとは何いふものじやサア昨日の金を返してくれねば詐欺取財の告訴をせねばならぬのじや 松「モンく何も告訴を受ける庄吉ではあるまい 泰「とばけなさんな約束通りカンコングの所へ往て見れば國から金が來ぬからといふて斷りじやシテ見れば詐欺に違ひないのじや 庄「彼程望んでおつた地面を今更斷りいとう道理はあり升せん若し間違つたら九百圓に利を附けて此千圓を上げやうではムリ升せぬか 泰「金迄持て居られる事なれば宜うムリ升一所に行升せう 庄「夫で泰助さん 泰「庄吉さん 庄「途中で味く 泰「エ 庄「イヤサア〇」ト掛けたる帽子を取るのが道具替りの知らせ「お供致し升せう」ト此模様宜く道具ぶん廻す

神戸海岸通行會の場

本舞臺高二重石垣の蹴込み此前浪除の杭波布花道附際より二重の上り口神戸の町を見たる夜の遠見都て神戸海岸通りの体波の音にて道具納る「ト向ふより熊藏葛籠を背負ひお百合の手を引出て来り」 百合「何も妾を連れて來なくつてもいじやアないか 熊藏「儂にてんな仕事をさせハイ左様からとやられちやア大變だうら 百「違いなしサ〇」ト舞臺へ来り」

往來のない此間に早く 熊よした○「ト葛籠を海へ投込み」丁度今が引汐時明方迄には鯨の餌食だ 百熊さん手拭が落たよ 熊何だ手拭「ト下を見る所を海へ突落し」百「生て置ては出世の妨げ其處を思つて口車に乗せた妾の色仕掛重ひ葛籠を御苦勞にも脊負てはまつた慾の深み妾はモウ歸るから地獄へでも極樂へでも勝手に出ハイ左様なら「ト上手より藤七蕎麥の荷を擔ぎ出て來り」藤七妹じやないか 百「ヤ兄さんか 藤今頃爰に何をして居るのじや 百「エ○何餘り暑ひから納涼に來たのサ 藤「此夜闌にアノ爰迄○「ト庄吉逃て出て來り荷又行當々行燈消る「エ、何をさらすのじや「ト泰助追欠け出て來り藤七を庄吉と心得」泰助「うぬ庄吉め「ト捻倒す」 百「何庄吉とは 庄吉「ヤ然いふ聲は 藤「お百合儂を助けてくれ 泰「何をうぬ○「ト藤七起返らうとして又押へ附けられるのが木の頭「能儂を欺しやアがつたか「トお百合は向ふへ逃げて這入り熊藏は杭に取附て本水を吐く此摸様宜く波の音仙の合方よて拍子幕

三幕目

役人替名

一玉 手令嬢花子	一侍 女	か	春
實は洋妾か百合	一同	か	夏
一穂 積安雄	一同	か	秋
一女 中頭磯崎	一同	か	冬
一家 扶小山雄藏	一伯 爵玉手義信		

須磨浦旅館親子面會の場

本舞臺平舞臺すつと上手大床是より下手御簾襖後に開くと通りの手摺須磨の浦の遠見橋掛戸家口共金襖大欄間薄縁を敷詰都て紳商別莊廣間の体侍女四人居て波の音濱唄にて幕明く「ト掃除をする事あつて」 お登皆さんか掃除も是でよいではあり升せんか 三人「是で朝仕舞が出来升たわいなア 登「流石大阪で石山孫兵衛といふ紳商の御別莊なり殊に御前様に御恩のある譯けで御普請を奇麗でお待ちも手厚いではあり升せんか お夏「此お座敷で御前様と御令嬢様が晴れてお久し振りの御對面はお嬉しい事であり升せう お秋「御前様の御令嬢様をれば定めて鮮やかなお生れであり升せう お冬「早く伺ひ度ではあり升せんか 三人「左様でムリ升るわいなア「ト上手より磯崎出て來り」磯崎「お掃除は済み升たか 登「貴婦はお女中頭 夏「磯崎様 秋「只今漸 冬「相済み升た 磯「夫は御苦勞でムんした此度花子様を東京へお伴ひ申に附御男子のみにてはか心細い事であらうと妾やお前方をお連れ被成た譯何分賤しき者の手に育つたる事なれば密かに致せと兼ての御沙汰 四人「其義は承知致してかり

升る。御前様にも只今おひるなり升たればお傍の御用をお伺ひ遊ばし升せ。四人、畏り升た
 「ト上手へ這入る」磯花子様には定めて氣高いお生れであらうなれど賤き者のお育て申上
 げたれば御歸京の後親御兄弟の御躰面に關る様なさもしいお舉動がなければよいがなア
 「ト上手より玉手伯侍女四人出て來り」義信、コリヤ磯崎花子は如何致した。磯、只今小宮様
 がお迎ひに參られ升てムり升る。善、然か「ト戸家の内にて」小宮、イヤ御案内仕り升せう「
 ト小宮お百合お虎出て來り」小宮、お伴ひ申上げてムり升る。玉、オ、お前が花子か此方へ參
 れ。小、御令嬢御前のお詞でムり升。虎、お進み遊ばし升せ。お百合、夫では御免被下升せう○
 サアお虎も一所に「ト舞臺へ來り」百、父上様お懐かしうムり升た。善、オ、大抵案じた事では
 はなかつた○虎とやら其方が丹誠中々容易な事ではなかつたらう禮は末長ふいふぞよ。虎、
 イエ何致し升て何をいふても賤い妾諸事行届き升せぬ事斗り其お阿りもなく難有お詞に預
 り升て婆々は涙が溢れ升わいなア。善、先第一に花子に家の者を引合はすであらう小宮に
 は只今逢ふたであらうが夫におるが女中頭磯崎にて此方の四人が腰元あれば以後其方の附
 人になるのじや。百、左様でムり升るか。磯、是は御令嬢様此度御父君様のお供をしてお迎ひ
 に參り升たる妾は磯崎と申者。善、妾共は。四人、お腰元。磯、何卒御前様同様にお目掛られて
 五人、被下升せう。百、是は御丁寧なる御挨拶今迄は下さまに育つた妾何事も氣長う教へて頂
 き度うムり升。磯、其御丁寧なるお詞では痛入り升れば何卒お詞お改め被下升やう。百、イエ
 玉手家の娘とはいふものゝ行儀作法も知らぬ妾主人と申も名斗りかれば。玉、イヤ花子謙遜
 致さず詞は改めてやるが宜からう。百、父上様の仰せなれば追々に改め升るでムり升せう。玉
 「人は出世の度に越して心の奢るが常なるに娘花子が今の謙遜床しき心も教育の宜かりし
 に因る所じや小宮磯崎左様ではあるか。小、磯、御意にムり升る。玉、東京には義曆連其方の弟
 もある事なれば歸京の上は可愛がつて貰はねば相成らぬ。百、夫と仰せがムり升せず共お懐
 かしう存じており升たレテ何時お歸りのお心組でムり升るか。玉、何時歸つても宜いのであ
 るが熱い東京へ急ぐ必要もなければ一月斗りは逗留を致さうかとも思ふて居るが。百、ス
 リヤ一月も。虎、御逗留を。玉、然じや。百、左様でムり升るか妾は義曆さんにも早う逢ひ度し
 一度屋敷へ這入つて見ねば華族方の勝手も知れねば何も安心が出来升せぬわいなア。玉、ハ
 、、、然らば明日歸ると致さう。百、難有存じ升る。玉、虎にの色々話しもあれば別間へ一
 寸来て貰ひたい。虎、畏り升てムり升る。玉、皆の者も一所に參れ○夫では花子。百、父上様小磯
 「イヤお入り。四人、遊ばされ升せう「ト奥へ這入る」百、今一月も逗留すると聞いた時に驚い
 たもカンニングと庄吉さんに嗅附けられては大變と思つたなれど明日歸れば先此事も大丈
 夫だ然し伯爵の令嬢は其苦ながら究屈なものだ。ト此間に少と樂を仕様か「ト伸びをする

下手より穂積出て来り 穂積「御令嬢御免被下升せ 百「ハイ貴君は 穂私に穂積安雄と申者
以後宜く〇ヤ貴嬢は一昨日布引にて 百「エ、何、か目に掛つた儘に洋妾 百「ム、穂、夫が玉
手の令嬢といハテなア 百「サア夫よと段々様子のある事マア寄つて被下升せ 穂「何であり
升か 百「穂積さん 穂「私の手を捕らへ何う遊ばそのでムリ升 百「妾しや貴君に惚れ升た穂
「エ、 百「定めて不品行の女だと思召でもムリ升せうがお虎の手にて育てらるゝ内貧しい
暮しを見るに見兼ね止むるも聞かず望んで商館へ奉公も義理にからんだ此身の薄命苦勞の
内に料すも一昨日貴君をお見掛け申心の底から戀いと思へどお名も所も知らず焦るゝ内に
今日再びお逢ひ申も深ひ御縁妾しや嬉しう思ひ升よ 穂「イヤ御令嬢如何に義理にからまれ
たとて華族のお身で洋妾とは情ない事を被成た者であり升なア 百「實に其時は義理故名譽
も思ひ升せなんだ何卒御口外はせず居て下さいよ 穂「申て悪くば黙つても居升せう百「
然して切ある妾の戀は 穂「夫は斷然御謝絶致升 百「エ、穂「左様の事を致しては大恩のある玉
手伯へ穂積安雄の義理立す貴嬢も一生身を誤り御尊父へは第一不孝お虎が辛苦も水の泡義
理と義理とにからまれて洋妾奉公被成たる貴嬢の義理も立升まい 百「然仰有るは妾をば賤
う育つたと侮つてのお詞でもあり升せう不義とはいへど末始終御出世の上細君に被成つて
被下事なれば義理の立ぬ事もない筈サ〇畢竟妾を侮つて商館奉公も父上へ告げる心があれ
ばころであり升せう 穂「イヤ決して左様の心はあり升せぬが其義は平に御謝絶致し升 百「
夫程お嫌ひ被成る事なら二度と再び申升まい 穂「スリヤ御斷念被下升て 百「ハイ東京へ歸
る事も一切斷念致し升た 穂「御令嬢何れへいらつしやるのですか 百「何れ死るか身を隠す
の内は遁れぬ身の詰り 穂「何と仰有る 百「妾の願ひを御謝絶のお心では洋妾奉公も御口
外遊ばすは知れた事左すれば玉手の家の耻父の顔にも關はる不孝夫じやに因て妾の覺悟 穂
「是非に及ばぬ一身を抛つてお心に随ひ升せう 百「エ、〇嬉うムんすわいなア 「ト奥にて
義信「虎マア話して行けば宜いに 穂「ヤ彼聲は儘に御前 百「お虎も爰へ来る様子 「ト奥より
玉手伯お虎侍女出て来り」 義「サ、穂積君、是にかつたか 穂「御令嬢へ御挨拶に出升てムリ
升 義「花子此安雄と申は乃公が子も同然懇意に致とが宜い〇穂積是が花子を育てた女じや
穂「夫ではお前さんが 虎「虎でムリ升る 義「只今奥にて是なる虎に保育教育の仕方から娘が
品行迄承つて安心致した 穂「どんな事を申上げ升たか 虎「何れ跡より東京へは伺ひ升るが
お身を御大切に遊ばして被下升せいなア 百「其方も無事で一日も早う東京へ来ておくれ 義
「何と穂積花子といひ虎といひ親子に増りし情ある中に自づと備はる禮節は賤しく育ちし
花子され共華族の令嬢夫人の中へ出しても愧る所はあるまい 穂「アノ御令嬢を 義「非難の點
は 百「エ、義「何うじや〇「ト團扇を取上るのが木の頭「少しもあるまい 穂「恐入り升てム

り升る「ト此模様宜く須磨琴の合方にて拍子幕

四 幕 目

役 人 替 名

一山 尾 妻 花 子	一山 尾 昇
實は洋妾お百合	一松 井 庄 吉
一馬 丁 三 藏	一金 齒 熊 藏
一車 夫 國 松	一積 穂 安 雄
一居 酒屋 番頭 仁助	一神 保 造 酒
一女 中 頭 磯 崎	仕 出 大 勢

本所相生町居酒屋の場

本舞臺家根附落間見附板羽目上手中窓の板羽目障子よ上酒御肴と記し下手二重見附戸棚暖簾口帳場格子の前に對立都て居酒屋の体爰に熊藏三吉國松仕出し仁助居て阿房陀羅經の鳴物にて幕明く ○勘定は爰へ置たよ 仁助難有ムり升○お二人様お代濟み □サア行う「ト仕出は橋掛りへ這入る」三言「ナイ酒をくんな 仁へい」○中臺二升替り○「ト對立の陸にて手を叩く」へい○神酒下一升替り 三「夫ヒヤア神保造酒といふは手前の屋敷の御縁者

故近頃引取てお世話被成を僕が屋敷の殿様が今連れてお出なすつたのか 然上夫で僕の車を持って迎ひに来て待つて居る間に飛た散財を掛た然し此春興入になつた僕が屋敷の御令嬢花子様の評判之何うだの 三「イヤモウ人望はすばらしいもので貴婦人の太關之山尾婦人との評判だ「ト熊藏前を向き」熊藏「三吉久しく逢はねへな 三「チ、金齒の熊藏か何時此東京へ來たのだ 熊此頃出掛けて來たが今聞けば大層宜所へ住込んだな 三「然上神戸の油臭へ西洋料理より片足上げた方が餘程宜や 熊然して其人は友達か 國「わつちやア玉手義信といふ華族の屋敷の車夫で國松といひやすがお心易う願ひ升 熊「ナイ番頭さんあつさりとした物を出してくんねへ 仁「畏り升た 三「ナイ熊よしてくれモウ出掛にやア成らねへから 熊「マア宜いや久し振だ 仁「お待遠様でムり升 三「氣の毒だなア 熊「時に三公今の話しの貴婦人がどうぞた 三「其奥様といふのが今も此國公の話した通り大評判で今日も龜戸の別荘へ來てお出被成るのだが凄いな宜い女だ 熊「夫は何にしても宜い屋敷へ這入り込んだものだ○酒が埒が明かねへが 三「イヤモウ時間だから別れると仕様 國「飛だ厄介に成たねへ 熊「何でも出掛るのか 三「爰が勤めで仕方かねへ○ナイ番州勘定をしてくんか 仁「へい廿八錢でムり升 三「釣は宜いよ 仁「難有存じ升 三「夫ヒヤア熊の字少と遊びに來てくれ 熊「今日往つても宜いか 三「大よしだ○夫なら熊藏 熊「三的國「大變に酔て仕舞た「ト橋掛へ

這入り仁助は上手へ這入る」熊「今三吉の話しでは彼お百合めが大臣の女房とは何所迄運の強い奴だか何にしても神戸の恨みを晴すに宜い手蔓をつかまへたわへ」ト對立を退け松井庄吉居て」庄吉「チイ熊藏夫じやア手前もお百合をせしめたのか」熊「ヤ汝は松井庄吉宜い所で出會たなア」○ヤイ汝はお百合と馴合て地面の金の分口も夫なりけりに影を隠し此東京へ來て居るのは彼奴と味へ事をして居やアがるに違へねへ夫に引替此儂は彼奴の爲に海へはめられ既に命の危うかつたも手前がさしたに違へねへのだ」庄「ヤイ馬鹿な事をいふな儂も彼奴に欺されて其上横溝に逃げて往た海岸通りでお百合を見掛け引捕やうと思た所邪魔が這入て見失ひ此東京迄流れて來たも彼奴の有家を尋る爲だ夫といふも彼奴と儂の手を切た其尺金は汝の仕業に違へぬのだ」ト天窓を打」熊「エ、何を仕やアがるのだ」ト是より立廻りにあり仕出大勢出て見物をする熊藏は出刃庖刀を取り切て掛るを仁助出て來り止る向ふより穂積安雄出て來り兩人を引分け」安雄「コリヤ待ぬか」熊「イヤ何所のお方か知らねへが」庄「打遣つて置ておくんせへ」安「庖刀杯を振廻しては危いコレ居酒屋の者見て居すとなせ見物人を追はぬのだ」仁助「へい」○サア皆通りおさい」ト上手へ這入る」安「一体何いふ譯か僕に話して聞すが宜い又扱方もあらうから」熊「へい難有ムり升實は儂は神戸にてスキャフトといふ異人の屋敷の馬丁であつた熊藏といふ者ですがカ」コングといふ

者の妾のお百合と此松井庄吉が喰附てけつかつて儂をお前さん海へはめて殺さうと仕やアがつたのでムり升夫で黙つて居られ升か」庄「モン旦那夫は皆睦でムり升」熊「何腔をいふものか」安「コレ黙つて居ぬか」○シテ貴様何したのか」庄「夫はお百合が夫な事をしたかは分り升せんが實は其女と私と欠落をする約束でムり升たが其間際に手切の刃を寄越したのでムり升所で今聞けば其奴が玉手の娘花子と化けやアがつて山尾の奥方に成た話しに花が咲き喧嘩をおつ始めたのでムり升」安「スリヤ其婦人に關係のある者か」熊「關係所か夫婦約束迄したのでムり升」庄「私も其通り遁れぬ中の女でムり升」安「ム、然か」○然し往來で喧嘩をなせば巡査の拘引に會はねばならぬ殊に伯爵のお名も出る事なれば僕の仲裁に任すが宜らう又其女の屋敷へ踏込み杯致しても先方は歴々なり女も鷲を鳥といひなして誣告の訴へおど起しちば相手が相手容易には相濟じまい」○サア夫じやに依て僕に任し此名刺を渡し置くから不服があれば宅へ來ていふが宜い悪い様には取計らわぬから」庄「へい夫では今日の所は熊」庄「お預け申升せう」安「夫で仲裁の甲斐があつたといふもの」○色と色との仲裁に這入た僕もさんざら知らぬ」庄「熊」エ」安「イヤ四海兄弟喧嘩は野暮じや」庄「熊」夫では旦那」安「必ず遺根を持たぬ様」熊」庄吉」庄「熊藏」庄「熊」覺へて居る」安「ハア扱僕に」○」ト隔て、洋杖を突くのが道具替りの知らせ」預けたのではないか」ト此模様宜く浮た唄にて道具ぶん廻す

本舞臺高二重見附床の間地袋戸棚中障子の銀襖上手障子家体下手落間庭中の中遠見庭木石燈籠例の所切戸松の釣枝都て山尾別荘の体か百合住居和らかなる唄にて道具納る。お百合、月日の立は早いもの東京へ来て一年餘り其後今の夫を持ち榮耀はすれども楽しみは安雄と切れて顔見る斗り随分伯爵の女房になつても楽しみが出来ないものだなア「ト奥より磯崎出て來り」磯崎、貴婦何時の間にか歸り遊ばし升たか。百合、其方は磯崎かいのう妾は最前戻り升たが今日の慈善會は盛會であつたわいのう。磯、然でムリ升たか今日も亦貴婦の御演説は大喝采でムリ升たであり升せうがお里方ららお附申て参り升た此磯崎迄人も罷累に致さませぬ。百合、夫に附ても安雄の事でいかひ苦勞を掛升たわいのう。磯、夫は御安心遊ばし升せ彼金も手渡し書附迄取り升た以上は元の事をいひ出す事は滅多にムリ升せぬ。百合、夫聞て安心したわいのう。磯、定めてお草臥でもムリ升せうお茶など入れて参り升せうわいなア「ト奥へ這入る」百合、先あれで安雄の所は安心だし又熊藏と神戸の海へ叩込んで仕舞たれば今頃は犬か猫に生れ替つた時分只心に掛るは庄吉さん然し山尾一人では喰足らないから外に若い男が欲しいものだが〇といつて役者も下さらないねへ「ト橋掛より安雄出て來り」安雄、奥様夫はお出でムリ升るか。百合、チャお前は安雄さん何しに爰へい。安、何しよ來たかとは難面仰

せ今ころ切れた中じやと申て優いお詞の一つ位掛けて被下ても罰も當り升まい。百合、是はしたり穂積さん以前は以前今は山尾伯爵の妻手切の金をお渡し申故障をいはぬといふ書附に判迄なさつた其貴君が今更兎や角仰有ては恩を受けた妾の夫昇の顔を汚す道理男女七才にして室を同うせずと申況んや夫のある花子とつと、いんで被下升せ。安、イヤ滅多に爰は動き升せん夫程貞操な貴婦なら僕も斯はいはぬのですが外に情夫の二人もあるでせう。花、エ、情夫があるとは。安、庄吉熊藏といふ言交はした男のある筈。花、夫を何して。安、先刻居酒屋で二人の者の烈しき喧嘩一人の者の熊藏は相手の男の庄吉とお百合と二人言合はせ海へはめて殺さうとしたといひ又庄吉は熊藏がお百合を勸めて手を切らしたと遺恨と遺恨の大喧嘩夫を僕が仲裁せしも貴婦のお爲を思ふ故夫に今のお詞は餘り難面花子様〇といふは化けたる騙りの骨頂其本跡はカンニングといふ米國人の妾のお百合何と違ひはあるまいがな。百合、うんちから二人に逢つたのですか。安、何偽りをいふものか此穂積安雄にも洋妾は承知なれども花子といふは偽りならずと思ひの外なる今日の仕宜然聞く上は思ひ切られぬ難面すれば身の素性を山尾伯へ申上る分の事。百合、夫程迄に妾を思ふて下さんすのかへ。安、思へばこそではあり升せんが。百合、本統に嬉しい人だねへ夫なら元相變らず色になつておくれでないク「ト下手柴垣の後ろより熊藏出て來り」熊藏、お百合能く達者で居てくれたなナ安

「ヤ貴様は先刻出會た百、お前は熊さん何うして爰へは、熊、此屋敷に居る友達の馬丁の三吉を手藝にして手前も恨みをいひに来た。百、モン穂積さん尙色々ナ○お話しもムリ升る故暫くおちらで、安、成程○然らば舊主人に挨拶を致して参らう、ト奥へ這入る」百、熊さん能く尋ねて来ておくれたねへ、熊、人を馬鹿に仕やアがるなへモウ其手には乗らねへぞ、百、夫ではお前が海へ落たを妾の仕業とでも思つて居るのかへ、熊、知れた事だモウ只の置かねへから覺悟をしるへ、百、チヤマア怖い事をいひたねへ實は彼時お前を海へめたのは庄吉めの仕業にて妾も打込まれる所をば通れて玉手へ乗り込んで爰へ嫁入りして後も方に一つ助つて尋ねて來なさんす事もあらうと朝夕に神信心能うマア生て居ておくれたねへ、熊、置きやアがれ不思議に命を助かつた故持前の其辨口死たら舌を出して笑つて居るだらう、百、是近苦勞の甲斐もなく庄吉故に疑ひ受け妾しや悔い、くわいなア、熊、チイお百合夫が陸なら何も泣にやア及ばねへヒヤアねへか、百、夫でも邪見な事斗りいふもの、熊、ろいつは悪い事をいつた手を突て誤るからお百合了簡してくれる然して是から何うする積りだ、百、何うといつてお前の顔を見ると爰に居るのが否にあつたから妾を連れて逃げておくれな、熊、夫の連れて退うけれど先立物は丸しきだが、百、妾も今は大臣の女房五千や一万圓はどとうともなる跡から支度をして行故お前吾妻の森で待て居ておくれ、熊、よし合點だ夫ヒヤア先へ

出掛るせ、ト向ふへ這入る」百、先彼熊藏は都合好く欺して返しは返したが是から先は何うしたものかア、心配な事が出來て來たなア、ト奥より安雄出て來り」安雄、情夫と二人欠落とは餘りひどい相談ですねへ、百、夫なら穂積さん今の様子を、安、襖の蔭から聞て居升た百、「夫は能く聞て下さい升た夫で妾の心が知れたのでせう、安、知れたればこそ恨みをいひに來たのです、百、夫はお前の逆恨み妾は彼奴の邪魔を拂つてお前と長く楽しむ心、安、夫ならあの熊藏をば、百、お前殺して下さんせ、安、滅相な何ぞて人を、百、ア、静かにおしやさい、彼奴を殺す氣になつたのも生けて置ては爰にも居られずお前と別れるが悲しい斗りか妾の潔白もお前に立邪魔さへ拂へば口先で夫を勤めてお前をば書記官にもする心夫ヒヤに因て熊藏を殺して下さいな○否なら妾も思案をして見升せうよ、安、イヤ熊藏を殺して來やう百、「夫ならお前は得心して、安、乗掛つた船なれば仕方がない是から直ぐに、百、夫で妾も安心するわいなア、安、夫ではお花、百、ア、モン、安、待て居てくれ、ト向ふへ走り這入る」百、へン亭主氣取りの面でい、や、ト上手柴垣の後より庄吉出て來り」庄吉、然亭主があられてたまるものか、百、ヤお前は、庄、松井庄吉だ、百、チ、能う顔見せて下さんした逢たかつた、くわいなア、庄、逢たかつたもすまじしいヤイ畜生め能く聞さやアがれ○地所の金の千四百圓も僕には百圓の拾扶持で跡は汝が取揚姿々跡のら來るのを待つて居れば思ひも寄らぬ退

狀に添へて寄越した千圓は元はといへば僕の金だ其後東京迄行衛を尋ね今日居所が分つたから裏から忍んで様子を聞けば彼二人と忍び間男能く馬鹿に仕やアがつたな 百其腹立は尤でムんすが彼熊藏はお前と妾の悪事をすつかり知られた故色でたらしめて一旦神戸で殺した彼奴が死もせず尋ねて来た故今穂積に殺しにやつたが妾の潔白 庄置きやアがれ夫も今の様子では穂積と笑む汝が了簡 百夫には斯いふ譯があるのサ「ト叫く」庄、夫じやア穂積と熊の野郎に相討をさす心か然いふて僕をモウ一盃喰はす氣か 百アレサお前も疑ひ深ひ實は手紙を贈つたも妾の山子を仕遂げた上はお前を徒兄と胡麻化して爰の屋敷へ出入させ樂しむ妾の了簡も成就せぬ内お前があつては露顯の元と大事を取つたが未其處迄運ばぬ内お前に逢つてはいひ譯立まいサア何うなりと腹の癒やうしておくれ 庄然いふ手前的心なら何もいふ事はなけれ共○然して跡は何うする積りだ 百サア相討にはさそもの、穂積は根が士族故熊藏を殺し果せるに違ひなけれと穂積が生て残る様では矢張跡が面倒なれば 庄イヤ夫は僕がやつ附けやう 百庄さん能くいつておくれた「ト時の鐘になり」 庄ヤ今打つ鐘は 花「アッヤ十二時○早く仕事をしておくれ 庄チ、合點た「ト向ふへ走り這入る」 百「手前達を生かして置ては折角爰迄仕上げたる華族様の細君になつて居られぬ故故今の様よ計らうたも折好く庄吉が来たのが幸ひ穂積は腕も利て居れと二人相手に同士打往生左すれば跡は心配なく山尾家の女將軍亭主を尻に敷麻の枕是で樂々寐られるだらう「ト奥より造酒出て來り」 造酒 飽迄大膽不敵の女天道は明かなるぞ 百ヤお前は其夜出會ふたる 造、虎が隣家の神保といふ者 百何うして爰へは 造「成程合點が參るまい○我神戸にて肺病に罹りしもお花が情けで本服なし旅費迄恵まれ悴の行衛尋ねて東京へ出たる所料らず小宮雄藏に出會ひ玉手の屋敷へ件はれ今日當家へ連られて料らず聞けば右の段々悴の行衛の知れぬのも全く其方の仕業ならんが證據なければ夫は扱置き素性を偽る毒婦お百合斯く某に會ふ上は一言の言譯あるまじ 百ム、 造山尾氏お聞ありしか「ト奥にて」山尾、委細是にて聞升た○「ト山尾磯崎出て來り」斯る事とは聊存せず神保の手前面目なし實に意外の事である 磯崎「全く御主人玉手様のお胤とのみ思ひしに 造「比ひ稀れなる大悪人サア眞直に白狀致せ 百モウ斯うなつちやア仕方がねへ如何にも洋妾お百合といふ神戸名代の莫連者サ○夫も小宮がお虎の内へお花を迎いに來た話しを聞た此方は地獄耳忽ち心も鬼百合の角を隠して姫百合と急拵らへのお嬢様玉手の屋敷へ乗込んで山尾夫人と身の出世も貧乏士族の横鎗にモウ運命も是迄だ 磯「テモマア惘れたものじやわいなア然いふ女と露知らず御主人を思ふ心より道に背いた戀の仲媒然いふ事があつたならなせ告げぬぞとお叱りもムり半せうが只今となり升ていお託びの申様がムり升せぬわいおア 造「某玉手伯も成替り山

尾殿の面前にて此奴の成敗致すであらう 山「アイヤ待たれよ昔堅氣のお心では首でも刎ん
了簡ならんが只何事も穩便に 造「イヤ餘りといへば憎い女 百「夫どうせ可愛がられる玉
じやアないのサ切る共突く共勝手におし逃隠れそる女じやアないよ 熊「いはして置けば返
すくぐも 造「人を人共思はぬ雜言 山「ハテ放逐とれば夫迄なり 百「イヤ此儘じやア出升せ
んよ手切の金を貰はぬ内は貧乏搖るぎも仕ねへのだ 造「返すくぐも不敵な女め 百「何うし
たと 造「さりとく愛を○「トお百合を蹴落そのが道具替りの知らせ「立去りからう「ト此
模様宜く合方にて道具ふん廻す

吾妻の森園討の場

本舞臺平舞臺真中に小き祠手水鉢吾妻森の建石松の立樹上下植込み向ふ野面の夜の遠見松
の釣枝都て吾妻の森の体爰に熊藏居て木魚入りの合方にて道具納る 熊藏「彼奴何時迄待た
しやアがるか餘もや待ちばうけを喰はしやア仕めへ「ト向ふより安雄仕込杖を持跡より庄
吉見へ隠れに附て出て來り」安雄「其處に居るのは熊藏ではないか 熊「ヤ然いふ聲は 安「穂
積安雄だ 熊「よ、お前さん何しにお出なさつた 安「山尾夫人に頼まれて參つた 熊「エ○扱
は僕を殺しに來たな 安「ヤ 熊「的切らさらの事だらう古手な事を仕やアがつたら若しもの
時の用意の出刃をどてつ腹へお見舞申すぞ 安「如何にも其方が推量通り夫も花子と此安雄

が二人の中の邪魔にゐる故殺しに來たから然思へ 熊「夫ぢやア汝こそ助けちやア置れねへ
○「ト出刃と仕込杖の闘闘の内庄吉は短刀を抜き兩人を覗ふ安雄は熊藏に切附け庄吉は安
雄を切りト「安雄倒れるを庄吉止めを刺し熊藏の死骸を捜す熊藏は松の木に取附き苦し
居る向ふよりお百合出て來り」お百合「庄吉さんか 庄「お百合じやアねへか 百「アイ妾だ
が然うして二人は 庄「穂積は死だが熊藏も死んだと思つて居るが○夫にしても手前何して
爰へ來たのだ 百「妾ぢや今追出されたよ 庄「何だ追出された 百「夫も素性がばれたので手
切の金でもとぐすり掛けて見た所是も神保に妨げられ撮み出されたお拂ひ箱サ 庄「然いふ
事だと悔んでも仕方がねへ 百「一先爰をお立と極めて 庄「何所ぞの宿屋へ泊り込み 百「何
かの相談をしやうじやアないか 庄「夫ではお百合 百「馬鹿な目を見て仕舞たねへ「ト花道
へ行く祠の後ろより神保山尾の提灯を袖にて隠し出て來り」造「不惑や安雄は毒婦の爲に
庄「ヤ彼提灯の 百「正しく神保 庄「夫なら彼奴が 熊「待ちやアがれ「ト造酒提灯を吹消すの
が木の頭 造「憎い女め「ト庄吉お百合は向ふへ走り這入る此模様宜く早めの合方にて柏子幕

大詰

役人替名

一夜 蕎 麥 賣 藤 七

一女

房

お

玉

一藤七娘	お百合	一洋	妾	お花
一神保	造酒	一小	宮	雄藏
一神保	莊八	一竹	林	お虎
一横溝	泰助	一手	代	善七
一馬丁	熊藏	一松	井	庄吉
一洋人	カンニング	特務	大	勢
一同	スギフツ			

蕎麥屋藤七内の場

本舞臺常足の二重見附押入佛壇暖簾口鼠壁上手障子家体下手腰障子此内一間程落間是に蕎麥の荷を置き例の所門口都て藤七内の体爰に善七お玉住居合方にて幕明く お玉一々御尤でムり升が何を申升ても藤七が留守でムり升故 善七「コソ」お内義能聞なさいお百合さん三年の約定を漸く一年半斗り勤めて其上千圓といふ金を持ての逃亡一年足す毎日來て談判しても同じ事斗りいふから今日は藤七さんに手切の談判をせねば成らぬのじや 玉宿の事も其事で出歩て居るのでムり升れを何卒今日の所は 善「イヤ今日斗りは言譯は聞升せぬ」ト向より藤七出て來るを泰助呼びながら出て來り 泰助「ナイ」藤七さん何も逃るには

及ばぬじやないの 藤「チ、是は泰助さんツイ思案にくれて心も附かず 善「マア内へいんで貰ひ升せう」ト舞臺へ來り 藤「お玉今歸つた 玉「チ、歸りなさんしたか 善「お前の歸りを待て居たのじや」○「イヤウ泰助さん又今日も落合升たか 善「チ、善七さん今日も例の掛合にムつたのか 藤「善七さん能うお出被成升た 善「餘り能くも出て來ぬのじやモウ何もいはいでも分つて居やう妹の持逃した千圓の金を戻せばよし左なくば裁判よ掛けるから返事をしなさい 藤「イヤ毎度申升通り妹の欠落に附ては夢にも知らぬ此藤七 善「コレ」夫之儀が聞ぬのじやお前の妹は庄吉と腹を合せ儀が金を千圓詐欺して隨徳寺お前は兄の事なれば加擔をまて居たに違ひない 善「サア二人の有家を聞かして下さい 善「サア隠さずに 善「いひなさい 藤「成程其お疑ひは御尤でムり升れを全く知らぬ此藤七訴訟沙汰に成り升ては外國人との關係故事むつかしい此事件實は私も心配してお詫びの種にと少々金の策の心當りもムり升て夫へ只今往たのでムり升が丁度お客があり升たので後程爰へ來てくれる善何卒確としたお返事は夕方迄お待被成て被下升せ 善「然いふ當のある事なら 善「不肖をしてやり升せうか 藤「左様ならお二人共 玉「お待被成て下さり升か 善「其代りには暮方迄に返事がないと 善「又押掛けて來升せ 藤「イエ夫迄には屹度お返事を致し升 善「夫では善七さん 善「泰助さん 善「サア參り升せう」ト向ふへ這入る 玉「モ」良人今の様にいはしやん

したはお金の心當りでもあるのかへ 藤「サア實はお虎さんが今では高歩貸になつて居る故
 妹の身に附て入用と相談したら元の馴染の事故聞てくれ様のと往て見たが生憎客來があつ
 たので爰迄來て貰ふ様に頼んで戻つたのじや 玉「夫は好い所へ氣が附なさんした然して何
 の位頼む心でムんすへ 藤「サア少うても五百圓借らすば双方へ談しが出來まい 玉「何ば懇
 意な中じやといふて五百圓といふ大金では 藤「サア其處が相談じや是非共借らねばならぬ
 今の切羽是もお百合の仕業かと思へば彼様な憎い餓鬼はないわへ 玉「そりや尤でムんすが
 其處が切ても切れぬ兄妹今にも爰へお百合さんが戻つて來たら何う仕なさんす心じやへ 藤
 「ハテ知たれ事カンコンジさんの所へ連て行き儘の潔白を見せる分じや 玉「マアきなく
 と思はずに奥で飯をたべて下さんせ 藤「かりや今の事が胸につかへて飯も咽へは通らぬわ
 い 玉「其様に思ふて此上に病でも出てはならぬわいなア 藤「夫では奥で飯でも喰ひお虎さ
 んの來るを待うかい 玉「何卒さうして下さんせ 藤「ア、苦の世界とは能ういふたものじや
 なア「ト奥へ這入る」 玉「良人の心配も氣の毒な事じやなア「ト押入を明けお百合半身出て
 お百合「お玉さん 玉「ア、コレ 百「様子は戸棚の内へ開升た濟まぬ事でムんすわいなア 玉「
 内の人は正直故心配も人一倍お前の戻つた事を知つたなら何様な事を仕様も知れぬ故機嫌
 の直る迄隠れて居て下さんせ 百「お前に迄苦勞を掛け濟まぬ事でムんすが夕べも話しをし

た通り山尾の屋敷を出て後は庄吉さんと北海道へ身を隠してゐる内に悪い病で此通り元の
 姿は何處へやら斯ういふ骸まなつた故再び神戸へ歸る道で庄吉さんに捨られて乞食同様な
 眞似をして戻つては來たなれど便る所もない故詮方なしに顔を拭ひお前を頼んでお世話
 になれど彼庄吉の薄情を思へば口惜しうてならぬわいなア 玉「夫もお前の心柄故人を恨む
 事もムんすまい 百「夫じやといふて餘りではあいかいなア 玉「ハテ其事は思ひ諦め病の養
 生でも仕なさんせいなア「ト向ふよりお虎出て來り」 藤「ハイ御免「トお百合屏風の後ろ
 へ隠れ」 玉「何方でムり升 藤「アイ妾だよ 玉「チ、お虎さんでムんすか能うマア來て下さ
 んしたなア 藤「最前藤七さんが來たなれど碌々話しも聞かなんだがモウ歸つて來たのかへ
 玉「ハイお前のお出を待て居升 藤「妾に用とは何だらう 玉「少々用達てお貰ひ申度て 藤「ハ
 ア金の事かへ夫は随分貸も仕様が其金高の位の位 玉「五百圓お借り申度のでムり升る 藤「
 エ、玉「サアこんなしが無い暮しにて五百圓の御相談は定めて御不審でムんせうが其お金
 があゝい時には夫の身にも關はる難義何卒是迄のお馴染甲斐に 藤「ア、コレ／＼何ば懇意中
 だといつて蕎麥賣家業で五百圓とは大き過るではないかいお百合さんとの縁に因り心安
 うはして居れど別に義理恩義になつたといふでないし夫に五百圓の金を貸せとは笑談も大
 概にしてお置な 玉「夫から貸せぬと仰有るのでムり升か 藤「貸せるか貸せぬか内の有様に

相談をして御覽な○何の事だ馬鹿くしいハハ大きに「トお百合出て」百「ア、モンお虎さん一寸待ておくれ 虎「誰だへ 百「妾だよ 虎「妾では分らないではないか 百「お百合だよ 虎「何だお百合さんだとへ○チャマア本にお百合さんひさい顔になつたねへ○然して妾を呼ぶのは 百「實と五百圓の相談も妾の身に附ての入用 虎「エ、 百「妾故ならお虎さん五百圓や千の金位は黙つて貸してもいいだらう 虎「とは又おせにへ 百「夫は覺へてお出だらう玉手の家へ行く時に千圓やつた事もあり又お花さんの替玉になつて大した金儲けをさした事も伯母さんあると夫に妾は化が顯はれ追拂はれた上今の御難お百合の爲なら義理にでも貸さねば冥利が悪るからう 虎「成程夫な事もあつた様に薄々覺へて居るけれど夫は禮をいふて貰つた千圓又玉手の屋敷へ往たもお前が好んで仕た仕事兎や角いふは妾の迷惑餘り恩にお掛けでない 百「別に恩には掛けないが然お前が義理を捨てたら妾の方にも思案がある 虎「チャ／＼そんな思案があるのだへ 百「ハテ知れた事玉手の娘をスヰフトの妾にやり私をお花の代へ玉に連れて往たお前の工みやぶれるふれで訴人をとするのサ 虎「夫をいはれて何なるものう 百「夫あら金を貸ておくれう 虎「サア夫は 百「お前が元の婆アさんならこんな事も云ないが今では立派な高利貸妾も借りにやア置かないのサ「ト奥より藤七出て來り」藤七「イヤ其金はお虎さんモウ借るには及び升せん 玉「やお前は良人 虎「藤七さんかいなア 百「兄さん面目ないくわいなア 藤「ヤイ面目あいといふ此面は何じやい子供の時から世話を焼かせ年頃にゐるがいな異人の妾になり度と兄にせむ五月蠅さに妹一人を捨てた氣でやつた所が今度の始末尙夫のみか今聞けば玉手様の娘と偽りお虎さんと馴合ふて○恐ろしい工みの様子いほう様かい人でなしめが○コレお虎さんお前何處へ行つしやるのじや 虎「一寸お手水○「ト門口へ逃出し「飛た奴が舞戻つて來やアがつた「ト向ふへ走り這入る」玉「モシ良人モウ了簡をして上げて下さんせ 藤「イヤ僕と一所にうせさらせ 百「行けと何所へ玉「連れて行くのでムんす 藤「ハテ知れた事カンニングさんの所へしよびいて行かねば兄の言譯が立ぬわい 百「夫斗りは堪忍して下さんせ 玉「モンお百合さんも詫びて居る事なれば 藤「エ、汝の知つた事ではない○サア早くうせぬかい「ト引ずつて向ふへ這入る」玉「アレモウ往て仕舞たかいなア情ない事になつて來たなア「ト奥へ這入る向ふより庄吉出て來り「庄吉「滅多に泊つて足が附ちやアならねへから藤七の内へ泊めて貰うと仕様○ハイ御免なさい 玉「ハイ○「ト行燈持ち出て來り「やお前は庄吉さん 庄「ア、コレ靜にしておくんあさい 玉「お前は何時此神戸へ 庄「實は今日歸て來たのだがお玉さんお前達者でいゝねへ 玉「然して何ぞ用でもあつて 庄「實は爰へは來られた義理ではおくれ共お百合さんと屋敷を逃げての仕舞が北海道でお百合さんに梅毒が吹出し男の介抱も届かぬ故一先神戸へ引返

さうと西京迄来て見失ひすごとく一人で歸つて来たが一体お百合さんは何うしたのか可愛
想な事を仕升たよ 玉「イエお百合さんは夕べ歸つて来たわいなア 庄「エ、玉「妾が何も知
らぬと思ひ白々しいろんな睦が能うマアいはれたものじやわいなア 庄「然えて何所も居る
のだ 玉「内の人がかんニンクさんの所へ連れて往たわいなア 庄「其奴は斯しては居られね
へわへ「ト橋掛りより泰助出て来り 泰助「藤七さん内にか約束通り出て来たぞ〇「ト門口
を明ける庄吉逃出さうとして顔を見合せ「ヤ汝と庄吉 庄「泰助さんか 泰「ヤイ爰は大泥坊
めサア警察へ一所に來い 玉「能う捕らへて下さり升た 庄「其お腹立は御尤でムり升るが泰
「エ、モウ言譯も入らぬのじや 庄「マア爰を放しておくんない 玉「放したら逃げ升わい
なア 泰「夫じやに因て放さぬのじや 庄「エ、放しやアがれ「ト泰助の脇腹を蹴る」玉「ヤコ
リヤ泰助さんを 庄「こいつア爰にも〇「トツカく」と出て門口を締るのが道具替りの知
らせ「居られねへわへ「ト此模様宜く早めの合方にて道具ぶん廻す

スヰフト商館の場

本舞臺平舞臺見附一間毎にカラス窓の白壁正面に大鏡テーブルに花を活し花瓶上下手西洋
戸入口の白壁大欄間真中に花カラス大時計都てスヰフト商館奥の間の体爰にお花かんニン
ク椅子に掛り半廻りより風琴の入りし月琴の合方にて道具納る お花「貴君能うお出なさい
升た かん「私今日どんたくあり升貴婦大さん嬉しい事あり升スヰフトさん今日歸り升た 花
「エ〇彼スヰフトさん歸り升たか〇貴君睦 かん「睦あり升せん「ト上手よりスヰフト出て來
り」スヰ「私今歸り升た 花「貴君御機嫌ようお歸り遊ばし升たなア スヰ「私留守世話あり升
た大さんお禮あり升お百合さん何う仕升た かん「私娘ベケく「ト上手より善七出て來り」
善「スヰフトさんお客あり升貴君逢ふ宜い スヰ「宜い〇娘爰に待て居る宜い 善「サアお出被
成升せ カ、ス「宜い「ト三人上手へ這入る」 花「心に染ぬ洋妾奉公も幸ひスヰフトさんが俄の
歸國で肌觸れず居たれども歸つて見れば情をい今夜は身を任せねばならぬかいなア「ト
下手より莊八出て來り」莊八「お花さん能う達者で居て下さつたなア 花「ヤ貴君は莊八さん
ヲモマア思ひ掛けない然して今迄何所にお出なさんしたかお案じ申ており升たわいなア莊
「私は去年お前の内で熊藏お百合の話しを聞けば恐ろしい工み事夫を聞かれた疵持足のお
百合に首を縊られて殺され升た 花「エ、 莊「夫うら海へ打込んだと見へ氣が附て見れば濱
船の中助けてくれたはスヰフト殿夫から米國迄連れられて漸今日一所に歸り升た 花「夫は
マア危い事でムんしたなア 莊「夫に附ても父の事御病氣之如何であるか様子を聞かして下
さり升せ 花「サア親御さんの御病氣も蔭ながらお世話申全く御本服なさんして貴君を尋ね
て東京へお立になつたは四月前 莊「スリヤ御全快の上東京へ〇夫といふも皆貴婦が親身も

及はぬお世話故とお禮を申升せうか 花「何のお禮に及び升せうシテ貴君を縊り殺したとは何ういふ譯でお百合さんが 莊「夫に附てお前の身の素性をも話したければ此事人に聞かれては親御の耻辱になる事故 花「夫なら妾の部家へ往て 莊「お話えを致し升せう」ト下手へ這入る上手よりカンニンク藤七お百合出て來り」カン「貴君悪い人私聞升せん」藤「サアお詫の爲に此通りお百合めを引ずつて參り升た カン「貴君啞お百合あり升せん 藤「サア此を顔になり升た故然思つしやるのも御尤でムリ升るが是がお百合めでムリ升 カン「フワイ」ト惱れたるこなし」藤「何卒是で此兄の疑ひ晴れて被下升せ カン「私疑ひ晴れ升せん金返す宜い」ト上手よりスヰフト出て來り」スヰ「貴君宜い私仲裁し升貴君娘にしてやる宜いカン「ベケ」 百「モシ旦那何卒妾を助けると思ふて カン「傍へ寄るベケ」私金入り升せん早く連れて歸る宜い スヰ「私仲裁明き升せんベケ」ト上手より造酒出て來り」造酒「コリヤ其女歸る事罷成らん 百「ヤお前は 藤「何所のお方でムリ升るか 造「某事は神保造酒といへる者其方ころ存せねどお百合には能く知つたり」スヰフト氏に面談の義あつて先刻以來別間で用談を濟ませしが料らす汝を見掛けし故呼留めしは逢はす者がある故に 百「何妾に逢はす者とは」ト上手より熊藏出て來り」熊「誰でもない元は此屋敷の別當熊藏だ 百「ヤ何うしてお前は 熊「生てゐるのは神保様の御介抱受け蘇つたる熊藏さんだ元の主人に詫びを兼神保様のお供にて逢つた手前の悔りより變つた面に驚ひたお百合悪い事は出来ねへか」 造「汝が素性を偽りし誠の玉手の娘といふは」ト下手より莊八お花出て來り」莊八「イヤ親上様其話しは私より 花「只今承り升てムリ升る 造「ナ、其方之悴 莊「貴爺様にも御病氣御全快の由此様を悦ばしい事はムリ升せぬ 百「夫ならお前も命を助り 莊「生て居るが不思議なか能此莊八を 造「アイヤ悴必ず共に手出し致すな先刻スヰフト氏より其方の様子を承り親も安堵致したわへ スヰ「お花さん華族の娘私庶ぬ大さん宜い 造「お花殿の身の素性を話せし所スヰフト氏にも暇の義を承諾致しくれ取計らひを玉手伯より委ねられし身共の悦び此上の花子殿東京にて親子の對面小宮殿委細の様子聞かれまか」ト下手より雄藏出て來り」雄藏「逐一承つてムリ升る 莊「誠に其方は雄藏殿 雄「貴殿の無事を承り大慶至極に存じ升る則主人の仰せには娘花子は神保殿の御子息と夫婦となして商法を営ませんどの思召 莊「スリヤ私と 花「女夫にして下さり升るう 造「親の悦び推量致せ 藤「其お悦びに引替へて情ないは此お百合兄になつても面目ないやら悲いやら合す顔もムリ升せぬわい」ト下手より泰助出て來り」泰助「モン」カンニンクさん カン「貴君泰助さん 藤「お前さんには約束の 泰「イヤ夫な事より松井庄吉が歸つて來升た 百「何松井庄吉が カン「貴君捕へる宜い 泰「サア捕らへ様とした所又ゑらい目よ會ひ升た カン「貴君弱いベケ」 百「然じや 藤「

コリヤ待妹何所へ行く 百 薄情者の庄吉に恨みをいはねば 藤 夫は汝が逆恨み皆自分が悪いからじや 百 イエ〜放して下さんせいなア (ト振放して下手へ這入る藤七も續いて這入る 其彼毒婦を捕逃しては 花 莊八さんのお身の恨みも 蓮 ヤレ待伴彼に恨みある者は其方一人にあらね共 熊 旦那の仰せがある故に胸をさすつて居る熊藏 孝 儂は庄吉めい告訴をば カン 夫は賛成 カ、ス、ロヤ〜 (ト此模様宜く拍子幕跡時の鐘にてつなぎ早幕にて引返す

湊川堤庄吉捕物の場

本舞臺高二重土手の蹴込み松の立木向ふ町家野面を見たる夜るの遠見都て湊川堤の体爰にお虎庄吉居て詭らへの鳴物にて幕明く 虎 コリヤ妾を殺す氣じやな 庄吉 知れた事だ濡手であはよく儲けた金悪事千里のお虎婆々ア是を渡して往生しろ 虎 人殺し 庄吉 エ、喧いほさきやアがるぢ〇 (ト宜く立廻りあつてお虎を切倒し金を出し「料らずい、奴に出ッくわして思はぬ金が入た少も早く然だ (ト上手よりお百合出て来り」 お百合 庄さん一寸待ておくれ 庄 ヤ然いふ手前は 百 お前に捨られたお百合だよ〇モン庄さんお前餘程薄情な人だね〇北海道で此病の妾をお爲こかしにして道迄連れだし難義をさせトの詰りが兄に連れられカンコングの目の前でさんぐな目に逢たのも元はといへばお前故其恨みをいひに来たのだ 庄 夫と儂が悪かつたが今夜不思議に金が手に入り五年や三年は不自由は仕ねへ積りだから恨みは捨て儂と一所に来てくれる 百 夫が眞實誠なら 庄 少も早く出掛け様〇ソレ士手が危ねへぞ 百 チャ大層に血がこぼれて居る 庄 成程恐ろしい血だなア (トお百合に切附る 百 ヤコリヤ妾を殺すのだねへ 庄 喧いやい夫なごまで纏はれては堪らねへからお虎と共に地獄の道連れ爰で往生しやアがれ 百 其薄情を知つて居ながらたばかりれたが口惜い 庄 どうぞ汝も疊の上ちやア死ねへ骸だ十九を此世の一期として湊川の土となれ 百 人殺し 庄 エ、面倒な〇 (ト宜く立廻りあつてト切倒せ止めを刺し「此で漸邪魔を拂つたドレ此間に然だ (ト探偵方大勢出て来り」 皆々 御用だ〇 (ト捕物の立廻り宜くあつてト庄吉を押へ附け「松井庄吉召捕だ (ト此模様宜く目出度打出し

明治廿七年七月十四日印刷
明治廿七年七月二十一日發行

(定價金四錢)

版 及 行 所
權 興 權 有

著 者

勝 彦 兵 衛

大坂市東區備後町四丁目四十番屋敷
勝 彦 謹啟

兼 發 行 者

新 實 八 郎 兵 衛

京都市上京區葎屋町上長者町上ル南俵町
四番戶
大坂市東區內本町橋詰町六十八番屋敷
周 彌 社

印 刷 者

前 田 菊 松